

福岡市教育委員会賞

「税に支えられた社会」

福岡市立当仁中学校 3年

喜多嶋 拓海

今年の四月一日、僕が百円ショップで、百五円払おうとしたら、レジの人に「お会計は、百八円です。」と言われた時、僕は初めて税について深く考えるようになりました。

日本の少子高齢化社会では、消費税の増税なくして、社会保障の充実がはかれないため、税率がアップしたと聞きました。日本の人口ピラミッドから考えると、将来的には、高齢者一人に対して1.2人の働き手で支えることになり、今後益々、僕達若者世代の負担が重くなるのが考えられます。日本は、電話一本かければ、直ちに救急車がかけてくれるし、風邪を引いてもすぐに病院にかかることができます。ぼくが生まれてから当たり前と思っていた事全てが、世界的には当たり前ではない事を知り、僕が当たり前と思っていた事は、将来に渡っても当たり前であり続けるべきだと思います。その為には今後の増税も受け入れるべきなのではと考えるようになりました。

三年前、僕は東日本大震災に合いました。僕の住んでいた街は、液状化で道も毎日遊んでいた公園もガタガタになりました。ライフラインである電気や水道も止まり、一日で生活は一変しました。不安な夜が明けると、翌日には、小学校に自衛隊の人が水を運んで来てくれました。小学校の校庭には仮設のトイレも設営され、その迅速さに驚かされたものです。今年の夏、久しぶりに街に帰ってみると、街は僕が住んでいた時以上にきれいになっていて、バリアフリー化が進み、進化した住みやすい街に生まれ変わっていました。僕が震災の翌日に水を飲んだり食事を取れたのも、そして、僕が育った街がよみがえることができたのも、国民一人一人が納税した税金のおかげなのです。

税金を納めることは、常に国民が助け合っているのだと思います。教育という国民を立派な大人に育てるための補助や、仕事を引退し、今迄の日本を支えた高齢者の方々へ敬意をこめて余生を補助する仕組み、災害に合った人々への補助など、税金によって救われたり、幸せになる人が沢山います。なので、国民は税を納めなければならないのです。もし、日本国民が税に関してとてもルーズだったら、ぼくの街も最低限の復興しかしていなかっただろうし、東北の被災地も未だにがれきの山だったと思います。

税金によって復興した僕の街は、僕の中では世界一の街です。なぜなら、日本の絆や思いやりが具体化され、日本人の苦難を乗り越えた力の賜物だと思います。僕はまた高校からあの街に戻ります。快適に住めることを税金を納めている全ての人に感謝し、僕らは常に税によって支えられ、支えていることを忘れずに生きていきたいと思います。